

教える側が誤解している！！

石井：最近、島根県の山東小学校で漢字教育の指導をしてきたんですけれど、この学校には特殊学級がありましてね、精薄記が四人いるんです。ここでは『石井式漢字教育』を始めたばかりですけれど、この指導をした先生の反省のレポートがここにありません。私、これを読みまして、それから実際指導するところも見ましたけれども、子供たちが漢字教育を受けるようになってから目が輝くようになった、というのです。そのことはこのレポートにも書いてありますが。

実は、精薄の子供たちに対して漢字教育をしたら、子供たちの目が輝いてきたということは昭和三十年代にすでにそういう実験報告があるんです。神戸の大橋中学校の特殊学級で、辻昌子という先生が、それまでのかなに代えて、漢字をどんどん教えたら、とたんに子供たちの目の輝きが違って来た、と報告しています。

山田：ほう、これまでの常識では、ちょっと考えられませんね。

石井：やはりいまだにそうなんですが、『精薄の子供たちは、知能が

低いから漢字はとても学べない』、という考え方があるわけなんです。それで漢字を教えるにしても漢字にかなをふるわけですよ。また、“危険”という漢字を教える場合に、「キ、ケ、ン」と言って一音一音離して教える。実はこういう教え方をすると、知能が低ければ低いほどわからないものなんです。教える者は「キ、ケ、ン」と分けて言った方がよくわかると思っっているようですが、実は反対にわかりにくくなる。

山田：私はね、八年ほど前に『太陽の詩』というシナリオを書きましてね、映画に作りました。文部省特選になって文化庁から奨励金もらったんですけどね。その映画を見て感動された藤岡弘明という先生が中心になって、岡山に、タケノコ村というのを建設しました。そこには『タケノコ学級』があって、映画にもなりました。

そこを見学したとき、中学一年から三年生ですけどね、『タケノコ通信』というのを作らされていました。各自、一ページ責任を持たせるわけですよ。七人なら七人で、一人一人が、一ページ責任を持って通信文を書くために、漢字はどうしても覚えなくちゃいけないということで、『タケノコ学級』の先生が作った辞引きが

あるんです。わからない人は、その辞引きを見て漢字を書く。すると書けるんですよ。初めから一ページの責任を持たせるというのが、辞引きを根気よく引いて、いい紙面作りに努力してるわけですね。

石井： 子供に責任を持たせたのがよかったのでしょうかね。

山田： もう一つは、先生の『石井式漢字教育革命』にも書いてありますけれど、身障児は根気がございませんよね。『タケノコ学級』では、一生懸命粘土を六百回、七百回こねさせまして、根気をつけさせる。その結果が辞引きを引いて、忘れた字を書かなくちゃいけない、漢字を覚えなくちゃいけない、という根気を引き出している。また裏山で開墾させたりして、体力を作る。版画を作ったりもさせる。もう目の輝きが、先生がおっしゃったようにたいへん生き生きとしている。そうだ、この子たちは漢字を読めたんだ、ということに、今この本(『石井式漢字教育革命』)を読んで気がついたんですよ。

粘土を一生懸命練って、七百回も八百回も練って棒状に作っていきますね。なかなか立派な作業をしていました。映画でも

そのことを取り入れておりましたけれど、時間が長くなるので、漢字を覚えるところをカットしちゃいました。ところが先生の本を読みまして、なるほどそうだ、あの子たちは漢字が書けたんだ、漢字を学んだということが目の輝きにつながったんだと、この本を読んで気がついたわけです。やっぱり大切なことなんてですね。

石井： 精薄児は決して知的なものにうといんじゃないんです。ただ能力を越えたものを与えるから受け入れないんです。幼児もそうですけれど、精薄の子供たちにとっては、言葉の音声分析ができません。幼児とか精薄児というものは、言葉を全体として直感的にとらえます。分析する能力がまだ未熟なんです。“危険”を、大人の考えで「キ、ケ、ン」と分けて言えばよくわかるだろうと思うのですね。ところが普通この言葉は「キケン」と間を置かずに発音しています。決して「キ、ケ、ン」とは言いません。だから、普通の言い方で、「キケン」という言い方で漢字を教えてやれば、その方が受け取りやすいので、目を輝かして学習します。『春男が翔んだ空』で教室で学習する場面があって、子どもが先生にあててもらいたいと思って手を上げて前へ前へと出て行く場面があ

るでしょう、あれです。ああいう熱心さ、純粹さは、この子供たちに特有のものですね。

山田： 私も、『春男が翔んだ空』を作りながらそう感じました。

石井： 皆さんがお気づきにならないようですが、ああいう子供ほど実は、知的なものに飢えているんです。人間である以上、みんな本能的に知的なものを欲しているんですね。

ところが知的なものはダメだ、受け入れるはずがない、と教える方が頭からそう決めこんじゃって与えようとしません。だから知的なものを与えれば生き生きとするのに、知的なものを与えないものだからいよいよ頭の働きがにぶくなり、いよいよやる気が衰えてくるわけです。

つまり知的栄養失調に陥っているわけですよ。ですから知的なものを、ことに漢字なんかを与えますと、目を輝かし、夢中になってやるんです。

神戸に『樅の木村』という、それはまったく村の形態を作っているものがあります。つまり『樅の木学園』を卒業したものが、こんどは社会人としてその『樅の木村』で生活するわけですね。さきほ

ど山田さんがおっしゃったように粘土をこねて茶碗を作ったり、ネクタイなんかも織ったり。それから牧畜なんか牛や馬の世話をして生活しています。まったく精薄者だけで村を作っているところなんです。

その村の中に『樅の木学園』という学校がありまして、そこで学校生活をやっているわけです。こういう子供は、普通だと五分間と一つの学習が続かないと言われていています。ところが、私はこの学校に漢字カルタを寄贈して、そのついでに漢字カルタの遊び方を教えてやりました。すると驚いたことに、一時間ぶっ続けにやったが、やめようとしません。一時間というもの夢中になってやるんですね。「もう先生、帰るんだからやめる」と言ったら、がっかりしましてね。ですからつくづく知的なものに飢えているんだなということを感じました。ただ残念ながら、先生方にそういう理解がなく、野杉先生(『春男が翔んだ空』の永六輔扮する先生)のような指導をして下さる方が乏しいんです。

山田： 私の娘は、中学二年なんですけど、今もって自分の名前が書けないんですよ。

これまでは『やまだ・みき』とひらがなで教えていたんですよ。ところが先生の本を見て考えついたことは、この本に書いてあるように『山』という字の方がやさしいんですね。何でちゃんと漢字を教えなかったんだと反省したんですよ。今でも『やまだ』なんて書けない。『みき』もやっと。『き』も『さ』と似たようなことになっちゃう、一本足りないということなんですね。

あの映画の中で『危険』という字を書いている女の子がいますね。母親も驚いた。今まで書いたことがない、あんな字を。ところが映画では、中学の子なんです、永さんを初めからホンモノの野杉春男先生だと思っちゃったわけですよ。だから授業のシーンも、ほんとうの勉強と思っちゃって。ところが、“危険”という字が書けないんですよ。それが自転車を使って、これは危険だよと教えたらすぐ覚えた。それで感じましたのはただ、漢字を教えただけで覚える子はいない。漢字の持つ意味ですね、それを教えてやるということが大切だということです。

石井： 子供には何よりも、経験するということが大事なんです。

山田： ほんとうに危いということ、ほんものの自転車を使ってやった

わけです。子供たちにも“危険”とわかったんでしょう、漢字で書いたんですよ。ぼくは驚きました。実を言うと、どう書くのかと心配していた。カメラを据えっ放しですずっと望遠で撮っていたんですよ、そうしたら、カットを見たら、書けてるんですよ。ぼくも驚きましたが、母親たちも驚かましてね。もちろん学校でそんな字は教えはしません。初めての経験なんです。その、“危険”という意味がわかったということで、覚えるものなんですね。私も撮映の体験で、なるほどなと思ったんですが、そういう点がやっぱり大事なことで、まず意味合いをわかって体験する、経験する、そういう中で覚えていく、意味合いで体験して覚えていくということ - 。私は、映画のたったあの場面だけでも、できた子がある、と驚いているんですよ。この本(『石井式漢字教育革命』)を読んでいたら、そういうことも、もっとうまくやったんですがね(笑い)。